



# 消えた街角：富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和三十四年時代に翻弄された有楽町

武蔵台地の端本郷台地先端部の波食台を江戸前島と呼び古くから集落が存在したらしい。天正十八年(一五九〇)、豊臣秀吉から関東支配を任された徳川家康は、西方台地の日比谷入江がくり込んでいた太田道灌の故地を拠点を選び、前島を生かした江戸の町づくりを構想した。そして駿河台地の土を運び、日比谷入江を埋め立てて内濠と外濠を設置。新開地を新藩大名屋敷にあてた。それが後の大手町、丸の内、有楽町である。有楽町は、関ヶ原合戦で家康に協力し信頼を得た織田長益に与えられた。長益は織田信長の弟で、有楽斎(うらくさい)と号する茶人であったことから、明治五年(一八七三)、新町名決定の際、有楽町と名が付いた。

写真の有楽橋は外濠に架かり、西方には帝劇、後方東側一帯は銀座で、通り抜けると築地川に達したが、現在は首都高速道路環状線になっている。また、有楽橋同様に新有楽橋、丸の内橋もあったが、昭和三十年後半の埋め立てで名称も残さず消えた。

官庁に近い有楽町には、朝日、読売、毎日、三新聞社が大きく構えていたが、昭和四十年代からの自動車輸送の困難により各社移転、跡にはいずれも大型商業ビルが建っている。特に有楽町駅西側の読売会館は、昭和三十二年(一九五七)にさう百貨店が進出入居し、有楽町で逢いましょうの歌で全国に名を広めた。

話は前後するが明治維新後、有楽町、丸の内、大手町の武家屋敷は取り払われ空地は練兵所などに使用された。その丸の内一帯を明治二十三年(一八九〇)、岩崎弥之助が払い下げを受け、西洋式オフィス街を建設した。また、南側の江戸時代南町奉行所があった通りは東京市庁舎用地にあてられたが、時代の推移で東京中央駅を皇居正面に建設。周辺に新たな都市を建設すべしとの構想から東京市用地を分断する形で新橋駅止まりの鉄道が延伸された。

明治四十三年(一九一〇)、有楽町駅が誕生。しかし、中央駅(東京駅の工事は遅れて大正三年(一九一四)十二月開業となった。東京都庁は鉄道線路に分断されたまま、戦後東側丸の内三丁目旧庁舎、西側に新庁舎、有楽町二丁目には交通局と分散。それが、淀橋浄水場跡に建設した新都心計画に伴い、平成三年(一九九二)、移転統合して現在の形になった。今では、西側の国際フォーラムと東側の交通会館が都史の片をとどめている。ちなみに交通局跡には新名所有楽町イトシアが建設、丸の内三丁目の旧庁舎跡地は様々な商業施設となっている。

なお、有楽町駅南側一帯には、関東大震災復興期に建設された日劇、東京宝塚劇場などの大型興業施設が多く存在したが、今は姿を変えている。(昭和三十四年四月十三日撮影)

文 富岡畦草(とみおか けいそう)  
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(富岡畦草撮影 平成21年7月9日)

今回の撮影場所は外堀通りの「有楽橋」。実は「外堀通り」は通称にすぎなく、正式名称は「東京都道405号外濠環状線」という。写真中央に見える建物は、今年4月に竣工した「丸の内パークビル」。写っていないが低層には「三菱一号館」が復元された。復元にあたっては約230万個の赤煉瓦を使用し、明治27年(1894)の竣工当時の姿を忠実に再現。都市の記憶を継承させる意義のあるプロジェクトとなった。(文：渡辺邦博)

